岩手県立博物館研究報告　第 40 号　2023 年 3 月　27～55 ページ
Bulletin of the Iwate Prefectural Museum, No.40, pp. 27-55. March, 2023

盛岡竿の特徴

―岩手県立博物館所蔵の盛岡竿を参考に―

近藤　良子

Characteristics of Morioka bamboo fishing rods

- The Iwate Prefectural Museum collection –

Yoshiko KONDOH

岩手県立博物館　020-0102　盛岡市上田字松屋敷 34　Iwate Prefectural Museum, Ueda Matsuyashiki 34, Morioka City, 020-0102, Japan.

Abstract

Morioka bamboo fishing rods pertain to Japanese-style fishing rods, which are made of bamboo that grow in Iwate prefecture. It comes in two types, namely, mountain stream and ayu (sweetfish) rods. The characteristics of Morioka bamboo fishing rods include bamboo from Iwate, Japanese lacquer black lines around sugeguchi (telescopic joints) and sugekomi (ferrule joints) for reinforcement, extremely light weight, easy to carry due to its jointed rods, and good reactivity to fish . This study reports the characteristics of Morioka bamboo fishing rods and provides a list of the materials or shapes observed from the early times to the present on the basis of previous records.

No document exists to provide evidence of the origin of this tool, but one can infer that it dates back to the late Meiji period. In terms of craftsmanship, this study predicts the rod manufacturer to a certain extent based on the lacquer black lines of the rods in the collection . Specifically, the study differentiates between the lacquer lines made by Yanagimura and Tanifuji, according to the brand of Yanagimura works .

はじめに

盛岡竿（註 1）とは、岩手県産の竹を材料としてつくられた和竿で、渓流竿と鮎竿がある。竿の形式は何本かの竹を接ぎ合わせて使ういわゆる“継ぎ竿”である。渓流用はイワナやヤマメ、ウグイなどを釣る川釣り用の竿である。主に県内産の竹を材料とし、竿の継ぎ目には補強のため漆が塗られ、独特の製法により仕上げる。

そもそも和竿とは、日本産の様々な竹を原材料とする延べ竿と継ぎ竿の総称で、その呼び名は戦後につくられた西洋式の六角竿（註 2）と区別するため、伝統的な竹竿のことを和竿と呼ぶようになったという（註 3）。竹を材料とした和竿が本格的に発展したのは江戸時代で、代表的なものに江戸和竿、京竿、庄内竿、川口竿、紀州竿などがあり、盛岡竿は京竿の伝統を受け継いでいるという説もある。江戸元禄期以降、太平の世で釣りは庶民のものとなり江戸や京都の和竿制作技術が各地に広がった。また、多種多様な魚種に富む日本の川や海の立地を背景とした好釣場、和竿の原材料である竹が容易に入手できるといった自然環境が釣魚文化を発展させ、日本各地で独創性に富んだ和竿を生み出す要因となった。ただ、各地の竿は独学で作りはじめた例が多く、盛岡竿についてもその歴史的経緯・発祥については不明な点が多い。

盛岡竿の特徴としては、県内産の竹を使っていること、補強としてすげ口、すげ込み部分には黒の漆が塗られていること、非常に軽いこと、継ぎ竿の形式で携帯性に優れていること、１本の竹竿の中に竿を仕舞ってもいい調子を出せることなどがあげられる。

かつては盛岡市内に数人の竿師がいたが、現在盛岡

竿の制作・販売を行っているのは、竿師石澤弘氏（盛岡市大慈寺町）が営む石澤和竿毛鈎工房だけとなり、「現代の名工」として「南部盛岡竿」と「南部盛岡毛鈎」の伝統を受け継いでいる（註 4)。

同じ東北の山形県の庄内竿や宮城県の仙台竿については、藩政時代の記録まで遡ることができる。それに比し、盛岡竿の発祥について明確に記す資料はない。また盛岡竿に関する先行研究もなく、現在では聞き取りを行うことも困難になってきた。ここでは、まず当館収蔵資料の盛岡竿の特徴を記す。そして盛岡竿について記載がある資料をまとめることでかつての、そして現在の盛岡竿の特徴がどのようなものであるかを整理する。昔ながらの盛岡竿の制作に長年携わってきた石澤弘氏のご教示も得ながら盛岡竿の名竿たる特徴についてまとめるものである。

1　当館所蔵の盛岡竿

岩手県立博物館では、現在盛岡竿を 14 本所蔵している。いずれも寄贈によるものであるが、2018 年度から 2020 年度の間に 12 本もの盛岡竿を寄贈いただいた。これは、釣り愛好家でもあり和竿の蒐集家でもある方からの寄贈とその周囲の方々からのご協力によって収集し得た資料である。これらの資料を表１にまとめた。またそれぞれの来歴や特記事項などについては以下にまとめる。

No.1　登録番号：98076（写真１－１）

昭和 10 年代制作ヵ。制作者は 2 代目柳村勝徳氏。戦前に寄贈者が柳村釣具店から購入したもの。No.1、No.2 は同一所蔵者。穂持のすげ口に 2 本線（写真１－２、１－３)。元竹のすげ口に黒漆が塗られており、縞模様となっている。手竹（握り）はすべて黒漆塗りの籐巻き（写真１－４)。

No.2　登録番号：98077（写真２－１）

昭和 10 年代制作ヵ。柳村 2 代目勝徳氏作。戦前に寄贈者が柳村釣具店から購入したもの。No.1、No.2 は同一所蔵者。穂持のすげ口には黒漆で細線２本が（写真２－２)、元竹のすげ口には複数線（写真２－３）が引かれている。手竹（握り）は持ち手部分と先端部分が黒漆塗りで、手元に近い方に細線 2 本が黒漆で引かれている（写真２－４)。手竹に「柳作」の焼印がある（写真２－５、２－６)。柳村家の焼印には「柳作」と「徳作」の印があるが当館所蔵資料で確認できるのは「柳作」のもののみ（No.5　191233－03 にも「柳作」の焼印あり)。

No.3　登録番号：191233－01（写真３－１）

柳村作。No.3～No.7、No14 は同一所蔵者。中竹、穂持のすげ口に細線 2 本の黒漆塗り（写真３－２)、元竹のすげ口に複数線があり、すげ込みには後に補強のため黒ビニールテープが巻かれている（写真３－３)。手竹（握り）は籐巻きで手元に近い方に細線 2 本、うち 1 本は剥離しているが線跡が確認できる(写真３－４)。

No.4　登録番号：191233－02（写真４－１）

No.3～No.7、No14 は同一所蔵者。柳村作。中竹と穂持のすげ口に細線 2 本の黒漆塗り（写真４－２)、元竹のすげ口に複数線（写真４－３)。手竹（握り）は、先端と持ち手が黒漆塗りで籐巻き（写真４－４)。

No.5　登録番号：191233－03（写真５－１）

柳村作。No.3～No.7、No14 は同一所蔵者。中竹、穂持のすげ口に細線 2 本の黒漆塗り（写真５－２)、元竹のすげ口に複数線（写真５－３)。手竹（握り）は、先端と持ち手が黒漆塗りで籐巻き、握り近くに細線 2 本の黒漆塗り。(写真５－４)。手竹に「柳作」の焼印あり（写真５－５)。

No.6　登録番号：191234－01（写真６－１）

谷藤作ヵ。No.3～No.7、No14 は同一所蔵者。元竹、中竹、穂持に複数線（写真６－２、６－３)。手竹（握り）は籐巻きで複数線（写真６－４)、手竹のすげ口に細線 3 本（写真６－４、６－５)。直径 1.8 ㎝の竿に 4 本の竿が収納される。

No.7　登録番号：191234－02（写真７－１）

谷藤作ヵ。No.3～No.7、No14 は同一所蔵者。元竹、穂持のすげ口に複数線(写真７－２、７－３)。手竹(握り）は籐巻きで複数線（写真７－４、７－５)。

No.8　登録番号：191613（写真８－１）

柳村作ヵ。No.8、No.9 は同一所蔵者。元竹、中竹、穂持に複数の黒漆塗り線（写真８－２、８－３)。手竹（握り)はすべて黒の漆で塗られ籐巻き(写真８－４)。昭和 30～40 年代に実際に使用していた竿。ヤマメやイワナ釣りに用いた。手竹（握り）すげ口に漆塗師である高橋勇介氏が自ら「一九六六年春」の文字を朱の漆塗りで入れた（写真８－５)。釣り糸について、高橋氏もかつて渓流釣りの糸として、馬の尻毛を撚ったものを使って釣りをしていたという。

No.9　登録番号：191614（写真９－１）

谷藤作ヵ。ヤマメやイワナ釣りに用いた。No.8、No.9 は同一所蔵者。元竹、中竹、穂持に複数の黒漆塗り線

（写真９－２、９－３）。手竹（握り）は籐巻きで複数線（写真９－４）。手竹（握り）に朱の漆塗りで寄贈者が自らの名を入れたもの「一九六二春」銘あり（写真９－５）。

No.10 登録番号：191615（写真１０－１）

柳村作。No.10～No.13は同一所蔵者。元竹、中竹のすげ口は黒漆塗り（写真１０－２）。手竹（握り）は籐巻き（写真１０－３）。

No.11 登録番号：191616（写真１１－１）

柳村作。手竹（握り）一体型で、握り部分は籐巻き。No.10～No.13は同一所蔵者。元竹、中竹、穂持のすげ口は黒漆塗り（写真１１－２）。

No.12 登録番号：191617（写真１２－１）

柳村作。No.10～No.13は同一所蔵者。元竹と中竹は太めの黒漆塗り線が見られる。元竹、中竹のすげ口に複数の黒漆塗り線（写真１２－２、１２－３）。手竹（握り）は籐巻きで複数線（写真１２－４）あり。この竿の所有者は、寄贈者の父で釣り名人の大林啓助氏で、山中吾郎著『ろまんをもとめて』に、筆者が藪川へヤマメ釣りに出掛けた際の思い出話の中に大林啓助氏が釣り名人として紹介されている（註5）。この竿は大林啓助氏が一番大事にしていた竿で3本継ぎ。全長488.5㎝に対し、重さは152g。非常に軽く、黒漆がすげ口、すげ込み以外にも塗られており装飾的にも美しい。

No.13　登録番号：191618（写真１３―１）

ステッキ竿、制作者不明。No.10～No.13は同一所蔵者。盛岡竿とは断定できない。No.10の釣名人であった大林啓助氏の所蔵であった。5本の竿が1本に納まり、上下両端に栓（木製）で蓋をする（写真１３－２）。金具の使用はない（註6）。ステッキ部分の下部は握りやすいよう工夫されている（写真１３－３）。

盛岡で制作されたステッキ竿については、盛岡竿の改良版として柳村勝徳氏が関わっているとする記述が『岩手の釣り＜淡水編＞』に以下のように見られる。「ステッキ竿は手竹の握りをつけない。昭和8年当時、東京・日本橋の松坂屋に展示して受けたが、その後勝徳氏は竿の先端を元にネジ式の金具を添えて外形を竹のステッキそっくりに造り上げた。しかも竿を継いで使う時は、金具が全て元に納まるようにし、ほど良い重さとなってバランスをとる役目に生かした。終戦後は元竹に樺皮を巻く「樺巻きステッキ竿」を完成させた。竿を持ち歩くほどに磨きがかかり、年数が経つと塗料では出せない特有のツヤで輝く。工芸美術の趣と奥ゆかしさがある」（註7）。

盛岡竿版ステッキ竿の制作者であったという柳村勝徳氏について上記言及があるが、同書「釣りよもやま話＝座談会＝」に柳村勝徳氏の談として、桜皮巻きのステッキ竿については、昭和10年頃に藤澤氏も作っていたという話が掲載されている（註8）。桜皮巻きの盛岡竿のステッキ竿は遅くとも昭和初期には制作されていたようだ。

また、1973～1985年一戸町長職にあり釣人でもあった中野清見著）の釣り随筆『暮の髙瀬川』に昭和56年（1981）頃、下北半島薬研の大畑川へイワナ釣りに出掛けた際の思い出話として「盛岡特産のステッキ竿と流し毛バリをもってバスに乗りこんだ。」という記述が見られる（註9）。また、岩手県釣り団体協議会元会長阿子島寛著の『渓鱗狂夜話』に一関市厳美町磐井川支流の産女川の治山ダムに設けた魚道（2000年設置）が機能し、放流イワナの遡上が確認されたのでイワナ釣りに出かける話として、「ステッキざおなんか持って…。君が家宝扱いにしている逸品の盛岡ざおじゃないか」という記述（註10）があり、盛岡竿版ステッキ竿は貴重な竿であったことがうかがい知れる。

No.14　登録番号：191619（写真１４－１）

制作者不明。No.3～No.7、No14は同一所蔵者。もともと手竹（握り）部分が欠損しており、寄贈者の依頼によりこの部分のみ盛岡竿の竿師である石澤弘氏（石澤和竿毛鉤工房）に2020年に参考資料として制作をお願いしたものである。太めの籐巻きで、手竹（握り）部分の黒漆線も石澤氏によるもの（写真１４－４）。元竹、中竹、穂持に複数の黒漆塗り線（写真１４－２、１４－３）。手竹（握り）に複数線（写真１４－４）。

２　盛岡竿の特徴

①　材料

盛岡竿の材料は県内産の竹を使用する（註11）。県産の和竿の材料となる竹には、矢竹（俗称ヤブ竹）、浮洲（ウキス）竹がある。かつての盛岡竿の原料の竹は、県南の花泉町で採取できる「淡竹（はちく）の浮洲竹（ウキス竹・篠竹）」であったという。盛岡竿の材料として採取する浮洲（ウキス）竹とは、春に芽を出した淡竹の1年目の若竹の女竹で、8月中旬から下旬（竹が水を吸い上げなくなる秋の彼岸以降に採取）にかけて伐る。江戸和竿に用いる「浮洲（ウキス）」とは別物で、盛岡竿に使用するウキス竹は、「磐井地方特産の竹

につけられた名称で、篠竹の一種だという説もあれば、突然変異で生まれた変種だという人もいる」（註 12）とあり、ここではいずれ県産の竹であると位置づける。

現在石澤氏が竿に使用する竹は、かつて弓矢の材料に使われていた矢竹（節がやわらかい女竹）で 1 年目の若竹は取らずに、竹のふく（竹の節についている皮、はかま、袋ともいう）が落ちているもの（石澤氏談）で、およそ 3～4 年の竹だけを伐る。このふくが落ちている竹は生長の頂点手前であり、材料として適しているという。石澤氏は 50 年前には花泉町でも竹を伐っていたが、現在は沿岸北部の北上川流域などで竹を伐る。2021 年 11 月上旬県内某所での竹伐採に同行した。寒い風が抜ける場所にある竹は幹が太く、竿の手竹・元竹用に用いるという。矢竹、真竹、篠竹といった種類の違う竹 1 本 1 本の節を合わせながら竿をつくり、おおよそ 400～500 本切り出すという。枝葉を切り落とし、170 ㎝ほどに切り揃え運ぶ。竿に適した竹は虫食いや割れがあっては使い物にならないので多めに取り、3 年かけて乾燥させ竹の油を抜き、漆を塗るなどの工程を経るので完成までに約 5 年かかる。

② 長さと重さ

盛岡竿の全長の長さは二間半（約 4.5m）と二間一尺五寸（約 4.1m）が一般的で、三間（約 5.4m）のものはヒカリ釣り用に用いられたという（註 13）。重さは二間半で 200g 前後、二間一尺五寸で 170g 前後、三間で 350g 前後。二間半の 4 本継ぎを 1 本に仕舞うと長さは 140 ㎝前後になる。

③形状

竹の小枝を落とし曲りを矯正して根元から穂先まで 1 本の竹でつくるのが延べ竿である。一方、継ぎ竿は 2 本から数本の竹をパーツに分けて継ぎ延ばして 1 本に仕立てた釣り竿である。盛岡竿の継ぎの数は、3 本継ぎから 5 本継ぎが多く、この本数の違いは客の注文によるものである。3 本継は丈夫であるが仕舞い込んだ際の長さがあり、4 本継ぎは短くたたみ込める。

そもそも継ぎ竿が生まれたのは京都で江戸よりも約 50 年早かったとされている。京都で江戸より早くに入れ子竿（一本仕舞の継ぎ竿。手元の太い竿の中に順に子竿を入れる竿）が存在していたといい、その根拠として延宝 3 年（1675 年）北村季吟の句集『花千句』に、「いれこの竿の釣に世捨る」という句が掲載されており、これが継ぎ竿に関する最も古い記録とされている（註 14）。また、江戸における継ぎ竿の歴史については、享保 8 年（1723）の日本最古の釣り専門書とされている『何羨録』（津軽采女著）に「竿には二継ぎのもの、三本継ぎのもの」との記述（註 15）、さらに 1770 年（明和 7）の『漁人道しるべ』にも「近年、竿に二継、三継有」とあり、この時代に継ぎ竿が存在していたことの根拠となっている（註 16）。

一般に継ぎ竿の利点として、携帯、弾力に優れている点、個々の特性を持つ竹を別々に接ぐことで 1 本の調子の良い竿をつくることができる点などがあげられる。継ぎ竿の利点及び欠点について、釣り入門書としては高い評価を受けた明治 39 年刊行の『釣遊秘術・釣師気質』に次のようにあげている。「継竿の失は、竿の力を殺ぎ、又傷み易すきに在れども、其の本を異にする二本以上の竹を合わせて、調子好き一本の竿と為す利あり。故に汽車電車中に、携帯して入るを害せざる限り、成るべく、其の納まりを長くすれば敢て丸竿に劣らずとす」（註 17）。同じく、明治 41 年刊行の阿部広著『漁釣全書』には「釣竿は根元強く穂先繊軟にして最も弾力に富むを貴ぶ故に継竿を利とするは弾力の調和宜しきを得たるを主とし併せて携帯に便利なるを以てなり」とある（註 18）。

明治、大正、昭和へと趣味の釣りはますます盛んになり、汽車を利用して釣りを楽しんだ頃には 3 本継ぎが流行り、バスや自家用車の普及とともに 4 本継ぎが幅を利かせるようになった。

④継ぎ方（図 1 参照）

竿の継ぎ方には、並継ぎと印籠継ぎの 2 タイプがあり、盛岡竿は並み継ぎである。まず、印籠継ぎは一方の竿に芯をすげ、他方を差しこむようにしたもので上部の竿の末部に臍を作り、下部の継ぎ口に挿し入れて継ぐタイプである。一方、並み継ぎは、臍を作らず上部の末部を細めて直に下部の口に挿し入れるタイプの竿である。並み継ぎの方は手元が太くなるという欠点があるが入れ子式にして仕舞を短くすることができる。

継ぎ竿の竿を継ぐ時は、すげ込み部分がすげ口部分の黒漆部分に隠れるまで差し込む。竿の力の平均を取るために自然に生えている状態の竹のように竹の枝芽が左右互い違いになるように継ぐ。そして仕舞い込む際、盛岡竿はほとんどが下方から上方に向けて収める（図 1 の矢印参照）。穂先から順に、穂先は穂持の下の

竿尻から、穂持は中竹の下から、中竹は元竹に収め、継ぎ竿が１本の元竹の中に収納することができ、元竹と手竹（握り）は並み継ぎを継ぐように差し込む。この握りの部分である手竹が蓋の役割を果たし、上方の節ほど穴を小さくしてあるため、逆さまにしても中の竿が落ちてこない。

⑤継ぎ竿の名称と数え方（図１参照）

手竹（または握り、古くは袴、ハカマ）、元竹、中竹（三番）、穂持（二番）、穂先（芯）と呼称し、盛岡竿は継ぎの本数に手竹（握り）を入れないで数える。

⑥漆

すげ口など力のかかる部分には補強のために漆を塗る。継いだ時に段差ができるのを減らすため、すげ口の肉は薄く削る。このすげ口部分の強度は、絹糸を巻き、漆で固めることで補うことができる。また、漆の持つ被膜効果によって竹を害虫や水から守ることができ、工芸的な美しさも表現している（註19）。

かつては盛岡竿に使う漆は浄法寺産のものを使い、下地に木漆、上塗りに上花漆を用い、塗り重ねは5～6回であった。漆を用いず桜の樹皮の樺を巻く樺巻きもあり、これは初期の盛岡竿によく使われていたという（註20）。

盛岡竿には、手竹（握り）やすげ口に数本の黒色の漆線が引かれているものが多い。この手竹と竿先に見える黒漆の線引き（細線と太線の組み合わせ）の仕方で制作者がある程度特定できるという（註21）。

柳村作の竿（写真１５～１９参照）には、元竹のすげ口に黒漆塗りの複数線が見られ、竿先から順に細線2本、細線1本、太線1本、細線2本の規則性がある。また、中竹、穂持のすげ口に2本線を引くもの（写真１５～１８）と、元竹同様穂持に複数線を引くもの（写真１９）とが見られる。

谷藤作と考えられる竿（写真２０～２２）には、元竹のすげ口に竿先から順に細線2本、細線1本、太線1本、細線1本、細線2本の規則性がある。

元竹のすげ口の黒の漆線である太線1本が細線に挟まれておらず、中竹、穂持のすげ口に2本線のあるものが柳村作に、太線1本の両側が細線2本に挟まれており、中竹、穂持に同様の複数線が塗られているものが谷藤作と思われる竿に共通して見られる。

３　盛岡竿の歴史と竿師

盛岡竿の発祥について根拠となる文献資料は見当たらないがその制作が始まっていたのは遅くとも明治時代後期から大正時代頃ではないかと考えられる(註22)。また、大志田諭氏が「新聞経営」に寄稿した随筆「盛岡竿」には、「明治後期から昭和初め迄は、8人の竿師が腕を競っていたらしい」（註 23）とあるが残念ながら竿師氏名の記載はない。

また盛岡竿の一番の特徴である一本仕舞の入れ子式（下から収納する方式の釣り竿）である点、手竹（握り）に籐を巻くという点から京竿の作風がうかがえるといわれている（註24)。京都の竿師の発祥は、天明3年（1783）と伝えられている江戸の竿師より以前といわれ、弓作りの技術が基本にあったと考えられている。さらに、盛岡竿の制法に京竿の影響があるのは、藩政時代北上川の舟運により近江商人が京竿を持ち込んだのではないかという説がある（註25)。

また、盛岡竿の先人的役割を果たした人物として、南部藩の矢づくり職人、大津清兵衛という人物に言及する記述が見られる（註 26)。竹をあぶって矯める技術は矢づくり職人と同じであり、その方法や道具も基本的には竿づくりに踏襲し得るものであるがこの人物に関する資料がなく盛岡竿の竿師であるか定かではない。

次に昭和初期の盛岡竿の竿師の具体について、明治・大正時代の竿師の記録がないため、昭和 10 年（1935)、12 年（1937）の『全国漁具商工名鑑　東部篇』(日本漁具新聞社編）掲載の漁具店経営者として掲載されている氏名を以下にあげる（註27)。

＜昭和10年（1935）＞

山口金次郎　釣具　神子田　……①
藤澤勘次郎　釣具　材木町　……②
柳村三五郎　釣具　新築地
山口藤作　釣具　新築地
小野寺サキ　釣具　川原小路

＜昭和12年（1937）＞

山口金次郎　釣具　神子田　……上記①
藤澤勘次郎　釣具　材木町　……上記②
上野善次郎　釣具　山岸
柳村三五郎　釣具　新築地
山口藤作　釣具　新築地
本間正一　釣具　鷹匠小路
小野寺サキ　釣具　川原小路

村上甚之助　釣具　下小路

釣具店の経営者としての掲載であるが、山口金次郎氏、藤澤勘次郎氏は盛岡竿を制作していた竿師である。その他の経営者氏名については、残念ながら竿師であったかは不明であり、今後の聞き取り調査などの参考としたい。

上記の『全国漁具商工名鑑　東部篇』掲載の氏名に加え、聞き取り調査やその他資料から照らし合わせると、以下①山口金次郎氏、②藤澤勘次郎氏、③柳村家、④石澤家、⑤桜井家の竿師情報が残る。

①山口金次郎（神子田）

山口氏が店じまいする際に石澤弘氏の父である省蔵氏が道具を譲り受けたと思われる竿師（石澤弘氏談より）。金五郎と表記するものもあり。

②藤澤勘次郎（材木町）

明治後半から昭和初期、現在の盛岡市材木町ふじさわエヴァホールの前身である「藤澤葬儀店」の経営者。葬儀店初代は盛岡市三本柳出身の藤澤喜三郎氏。初代喜三郎氏は江戸末期生まれで、明治 35 年（1902）に逝去。材木町では当初貸し道具屋を営んでいた。2 代目は喜太郎氏、大正 15 年（1926）逝去。3 代目に当たるのが勘次郎氏で貸し道具屋の他に葬儀の取り仕切りを行うようになった。また、葬儀屋の傍ら趣味で竹竿をつくっていたといいその腕前は名人級で、通称がんこ屋（盛岡の方言で葬儀屋）の盛岡竿として知られていたという（註 28）。また、『岩手の釣り＜淡水編＞』中の「釣りよもやま話＝座談会＝」に柳村勝徳氏の談として仏具店の藤澤勘次郎氏が大正の中頃から盛岡竿をつくっていたという（註 29）。また、手竹（握り）で蓋をして落ちてこないつくりとしたのが、勘次郎氏ではないかといい（註 30）、手竹をつけるようになったのは昭和 6 年頃から柳村氏が始め、藤澤氏のものには手竹はなかった（柳村勝徳氏の談）と話しており、くい違いが見られる（註 31）。

その他関連資料として、藤澤勘次郎氏ら釣り仲間が昭和 10 年（1935）、材木町永祥院境内に建立した「釣供養塔」が確認できる（註 32）。

③柳村仁太郎氏（初代）、勝徳氏（2 代目）、勇蔵氏（3 代目）

柳村釣具店の初代は、柳村仁太郎氏（1934 年逝去）で昭和 3 年（1928）、盛岡市厨川片原で釣用具店を開業。もとは材木商（鉄道の枕木商）で、隠居仕事に好きだった釣用具の店を開いた（註 33）。2 代目勝徳氏の代に釣竿づくりに専念し、「盛岡竿」と呼ばれる地竿を手掛け、その品質の良さは「盛岡の柳村」と知られるほどだったという。戦後、盛岡市大通 3 丁目（開運橋際）に移転。勝徳氏は、独自の竹の乾燥法（「柳村式乾燥法」）を考案した竿師で、原料竹へ煤を振りかけながら乾燥したという（註 34）。また、盛岡竿を外見がステッキのようになる「ステッキ竿（註 35）」の開発に携わったとされる。平成 10 年（1998）に勝徳氏が逝去すると娘婿の勇蔵氏（1933 年紫波町生まれ）が 3 代目として「柳村釣具店」（盛岡竿製造・釣具全般専門）を経営。なお、盛岡式毛鉤は昭和 9 年（1934）からつくっていたという。

④石澤省蔵氏（初代）・石澤弘氏（2 代目）

石澤家はもともと農家で種苗店を営んでいたが、弘氏の父である省蔵氏（1912-1975 年）が釣り好きで、神子田の竿師であった山口氏（弘氏の記憶で神子田の山口氏との話があり、おそらく金次郎氏ヵ）から道具を譲り受けて竿づくりを始めたという。弘氏は 1944 年、盛岡市鉈屋町生まれ。現在、盛岡市大慈寺町で石澤和竿毛鉤工房を営んでいる。盛岡竿の伝統を受け継ぎ、制作・販売する県内唯一の竿師である。弘氏は、集団就職で東京に出た後、成人後、故郷に戻り、父を手伝い和竿の制作を始めた。父から直接竿づくりを教えられることはなく、弘氏は目で見て技を盗むしかなかったという。父がつくった竿について、「節が出て不格好だが、大物がかかってもビクともしなかった」と語っている。その当時はグラスロッド（昭和 30 年前後に登場）やカーボンロッドなどの新素材が登場した時期でそれらを含め、昔ながらの和竿の制作も行いながら釣竿や釣具などを販売して店を維持していた。25 歳の時（1970 年）に父が 59 歳で急逝。40 歳代の時（1984 年～）、京都の竿職人であった故・平田文男氏に和竿制作の助言を受けながら和竿制作に専念。ある時、漆を習った方が良いとのアドバイスを受け、岩手県工業指導所（現在の件工業技術センター）で古関六平氏（1918～2011 年、漆芸家）、高橋勇介氏（塗師）のもと漆技術を学んだ。この漆の師匠は釣り仲間でもあった。かつての黒漆塗りの盛岡竿から螺鈿細工や黒以外の色漆を取り入れるなど「南部盛岡竿」、「南部盛岡毛鉤」の

制作にあたっている。

盛岡竿の竿師については、石澤氏によれば昭和35年頃（1960年代）には柳村（開運橋際）、谷藤与五郎氏（木伏）、森喜一郎氏（南大通三丁目、1902年生まれ）、石澤省蔵氏（大慈寺）の4店舗があったという。

⑤桜井善八氏（初代）、善治氏（2代目）

桜井善八氏は、下橋町にあった桜井釣具店の店主。2代目は善治氏で父の跡を継いで盛岡毛鉤職人として活躍。盛岡毛鉤とは、盛岡毛鉤は針の前後に2カ所のミノ毛（鶏の毛）を巻き、タラの木の重りを兼ねた浮子と5本ハリを使用する毛鉤で、善八氏が大正10年（1921）前後に考案したという（註36）。盛岡毛鉤の創始者桜井善八氏は、名鶏飼育が趣味でこの鶏の羽根で毛鉤を巻き、ウキの代わりに替えて使ったのが始まりだという。また、桜井氏の竿は手竹のない一本仕舞の竿であったらしく、昔ながらの盛岡竿は地元の竹だけでつくっていたという（註37）。

4　盛岡竿の魅力

和竿の魅力について、明治33年刊行の久徳外雄（水産伝習所得業生）著作の『日本釣漁法全書』釣竿の項に、「釣竿は手を長く延ばしたる代用物にて陸岸に於て遠くに釣鉤を致さしむるものなり而して釣竿は、硬強、弾力、軽便なるものにあらざれば其用を務めざるなり。日本に於ては釣竿として最も軽便なる竹の如き生産するあれば大に幸福なりと云うべし。」（註38）とある。竿が軽いことと長さがあるということは釣りにとって重要なポイントである。竿は手の延長であるかの如く、あたりの感触を手に直に伝えるものであり、丈夫で弾力性、軽量性を兼ね備えるのが和竿の魅力である。その弾力性、軽量性を実現させる素材が竹である。竹は種類によって特徴が異なるばかりか、同じ種類であってもその生育年数や環境で硬さや粘り、重さが違う。こういった様々な個性を持つ竹を組み合わせて竿師が重さや長さ、調子、美しさなどを自由に表現する。同じ竿は1本もない。

釣り竿は、古くは竹を材料とし、昭和30年前後にガラスを線維化して筒状にしたグラスロッド、その後炭素繊維を筒状化したカーボンロッドが登場するが、竹の構造はグラスロッドやカーボンロッドなどに使用される繊維強化複合材料の構造と同じであるという。竹は維管束と呼ばれる繊維組織が内側から外側に向かって密になっており、その周りを柔らかい組織が覆っている。つまりこの構造が繊維強化複合材料そのものであるという（註39）。和竿はこれら人工素材の特徴をそもそも備えており、豊富に自生する竹を材料とする竿の誕生は日本においては必定であった。

ここから考えるに材料竹の分析の必要性はあるが盛岡竿の魅力の一つとして、県内産の竹を材料として軽量性と弾力性とを出している点があげられる。関東の竿で鮎釣用の竿は全長四間で560g前後であることと比べて盛岡竿の鮎竿は全長三間で350g前後と格段に軽い。

また、盛岡竿はその長さと軽さを実現するため、1本に仕舞い込むことができ、ここに竿師の技量の高さが見いだせる。当館所蔵の盛岡竿を見ても直径2㎝前後の竿に4本もの竿を収納することができる。継ぎ竿は継ぎ数が増えれば増えるほど竿の重みが増してバランスの調整が難しくなる。盛岡竿は継ぎ竿にしても良い調子を保つことができる点が魅力であり、わずかな竿の振動を手のひらに伝える。「胴調子の竿は魚も驚かない。魚を竿によって取り込むのが釣りの楽しみ。今の竿は道具が勝ちすぎている。釣りは魚との駆け引き。」と石澤氏が語るように盛岡竿を使うことで釣りの醍醐味が実感できる。

また、竿の調子は竿師が釣り人の好みを計算して実現する必要がある。使っているうちに竿が生じることに関して石澤氏は、「使っては直し、直しては使う。つくるまでは竿師の仕事、それを使い込んで固めていくのはお客さん。竿師は竿の生みの親、お客さんは育ての親」という。名竿と呼ばれる竿は、癖がついても火入れをすればもとに戻るようにできている。丁寧にメンテナンスすることで竹が竿として狂わなくなる。盛岡竿はつくり手と使い手が一緒に育てる竿である。

盛岡竿とは、弾力性に富んだ県内産の竹の特質を竿師が見極め、客の好みに合わせて調子・竹のしなりや軽さ、繊細ながら力強いという竹がそもそも持つ特徴を生かした自然の美しさと考え抜かれた実用性とを兼ね備えた竿である。

おわりに

盛岡竿については、かつて釣り人の間で「海の庄内竿、川の盛岡竿」「盛岡竿を持っている人に近寄るな」などその名竿ぶりを表す言葉が語られていたようであるが、そう言わしめる所以が盛岡竿には確かにある。

名竿の基準は、軽量性と弾力性である。その 2 つを実現すべく、盛岡の竿作り職人は県内産の竹や漆に注目した。盛岡竿は、県内産の竹を材料とし漆で補強するといった自然の素材を竿師が客の意向を含んで巧みな技で調和させる手わざがなせる名竿である。

盛岡竿の伝統を継承する石澤氏の工房で制作現場を目の当たりにし、また当館所蔵の盛岡竿の所有者であった釣り人たちの物語を垣間見ることで、盛岡竿の独創性に魅了されていくこととなった。しかし、盛岡竿の、特にも竿師についての情報は聞き取り調査によるとことが大きく、今後ますます情報が得られなくなる恐れがあるとの危機感がある。

本稿では、盛岡竿の特徴や竿師について記述がある書籍や新聞、雑誌等の記事をかき集め、昭和初期からの竿師についてまとめ、盛岡竿の特徴をつかむことに主眼をおいた。しかしながら筆者は釣りに疎いため具体性に乏しい記述もあり、至らぬ点も多く含まれている。広くご教授を願いたい。また、詳細な制作工程は調査継続中であり、竿師の技巧については今後示したい。

謝辞

今回盛岡竿について特徴をまとめるにあたり、時間を割いて丁寧にご教授くださった竿師・石澤弘氏に深い謝意を示します。また、当館で盛岡竿を多数所蔵できることになった背景には、盛岡竿の寄贈者の一人でもある泉山恵一氏のこれまでの聞き取りなどの調査があったことがあげられます。竿師を辿るにあたっても様々な文献や聞き取りの結果をご提供いただき、格別のご配慮を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

註

1 盛岡竿に関しては、はっきりした定義はない。本稿の盛岡竿の特徴については、かつての竿師の取材記事や現在の竿師への聞き取り調査、文献などを参考にまとめたものである。

2 六角竿とは、竹を細長い正三角に削って接着剤で 6 つ貼り合わせてつくられた竿で、戦後よく売れたという。6 代目「東作」松本三郎『江戸和竿職人　歴史と技を語る』（平凡社、2006 年）pp. 18-20。

3 和竿の名称について前掲註 2 に、この呼称は戦後昭和に入ってからであるとし、それ以前は「竿」あるいは「釣り竿」で意味が通じていたという。また、戦後の一時期竿師が西洋式の竿である六角竿をつくり、この竿を手掛けたのが松本三郎氏の父である竿師「泰地屋東作」4 代目松本政次郎。また、5 代目松本栄一（三郎氏の兄）『和竿事典』（つり人社、1991 年）においても和竿の定義に触れ、「舶来の六角竿は、はじめ西洋竿と呼ばれこれに対する日本独自の釣り竿を和竿と呼んだ」としている。

4 石澤弘氏は現在、「南部盛岡竿」の制作者としてかつての盛岡竿の伝統を受け継ぎつつ、弘氏の代から樺巻き竿や螺鈿細工が施された竿を制作・販売している。平成 12（2000）年盛岡技能功労賞受賞、岩手県卓越技能賞受賞、平成 15（2003）年「現代の名工」として厚生労働大臣卓越技能者表彰を受賞、平成 25（2013）年黄綬褒章受勲。

5 山中吾郎『ろまんをもとめて』(山中吾郎著作刊行会編、熊谷出版部、1984 年）p. 131。

6 『釣具曼陀羅』（毎日新聞社、1980 年）p. 145 の川村忠氏の盛岡竿の写真にこれによく似たステッキ竿（栓が木製）が見える。また『岩手の釣り＜淡水編＞』（熊谷出版、1980 年）p. 35 にもステッキ竿（樺巻きで栓部分がおそらく金属）の写真が見える。

7 岩手県釣り団体協議会監修『岩手の釣り＜淡水編＞』(熊谷印刷、1980 年）p. 34。

8 前掲註 7 書 p. 256。

9 中野清見『暮の髙瀬川』(熊谷印刷、1985 年)pp. 180-181。

10 阿子島寛『渓鱗狂夜話』「名ばかりの魚道」（熊谷印刷、2002 年）p. 225。

11 柳村家の盛岡竿は、手竹以外は県内産の竹を用い、「かつて手竹に利用する女竹は千葉県館山から入手した」（前掲註 7 書　大志田諭「南部に根付いた伝統の風格盛岡竿」pp.34-35）とあり、1 年ものの新竹を使っていたという。

12 松本栄一『和竿事典』（つり人社、1965 年）によると、江戸和竿でいう浮洲（ウキス）竹とは、一般には身の入らない当歳竹を指し、伐り時による竹の呼び名の一つであるという。盛岡和竿の浮洲（ウキス）竹の産地は岩手県一関市花泉町付近の北上川川筋であるという（『釣具曼陀羅』毎日新聞社、1980 年　p. 141 参照)。また、矢竹も浮洲竹も篠竹とするものもある。

13 ヒカリとは岩手中心の呼称で、降海性サクラマスの稚魚を指し、早春に釣る魚である。盛岡竿は本来ヤマメかこの春先のヒカリ釣りに使うものだともいう（「街もりおか」No. 183　1983 年　太田俊穂「釣りざんまい」p. 34)。

14 「釣文化 18 号」（釣文化協会、1988 年）参照。『花千句』について、北村季吟(1624-1705)は松尾芭蕉の師で国学

者、俳人、近江国の出身。京都に出て俳句にいそしんだとされる。「いれこの竿の釣に世捨る」の句は、愛知県立大学図書館貴重書コレクション『花千句』(上巻) 1－0011参照。

15　津軽采女『何羨録』(1723年)、水産総合研究センター図書資料デジタルアーカイブ（織田完之旧蔵本、写本）参照。

16　玄嶺老人『漁人道しるべ』(1770年）は、大橋青湖編『釣魚秘伝集』(第一書房、1928 年）所収本 p. 293。『漁人道しるべ』は『何羨録』の粉本で広く流布した書。

17　石井研堂『釣遊秘術・釣師気質』(博文館、1906年)p.695、水産研究・教育機構図書資料デジタルアーカイブ参照。

18　阿部広『漁釣全書』(青木嵩山堂、1908年）p.13。

19　前掲註2書 p. 210。

20　『釣り具曼陀羅』(毎日新聞社、1980年）p. 144。

21　泉山恵一氏が 2008 年に柳村勇蔵氏を訪問し手持ちの盛岡竿を見てもらったところ、手竹と竿先部分の黒漆線の引き方で制作者が分かるとの話を聞いており、その線の引き方から谷藤作のものであると語ったという（泉山恵一氏編著の同人誌『狐森通信』第16号 2008年1月)。

22　盛岡竿発祥を探る参考として、元治元年（1864）発行の「元治年間盛岡藩産物番附」5段目、右から14番目に「前頭　盛岡　釣竿竹」の文字が見える（もりおか歴史文化館蔵)。また、明治21年（1888）発行の「盛岡諸有名人一覧表」(南昌荘蔵、盛岡市施行の前年に呉服町印刷業「又玄堂」の主人横井顕行が刊行、1枚5銭で販売したもの）に「釣道具師　宮沼善兵衛」(明治 31 年 9 月 10 日印刷　同年同月 13 日出版御届）の名が見える。いずれも詳細不明。

23　大志田諭著「ずいひつ　盛岡竿」(「新聞経営」1988年）元岩手日報社取締役販売局長の随筆。

24　手竹に籐を巻く点が京竿の影響を受けているということについて言及している書は以下のとおり。『岩手の釣り＜淡水編＞』(前掲註7書 p. 36)、『釣具曼陀羅』(前掲註 6　書 p.144)、小田淳『釣具考古・歴史図譜』(叢文社、2017年）p. 18。

25　『釣具考古・歴史図譜』p. 18、p. 21。

26　前掲註7書 p.36 で柳村勝徳氏の談として「大津清兵衛という人が関係しているらしい」、「大津氏は矢づくりの職人だったので、竿をつくる竹の矯正（直し）もうまく出来たと思われる」などの記載があるが出典元不明。

27　『全国漁具商工名鑑　東部篇』(日本漁具新聞社編、1935年、1937 年）国立国会図書館デジタルコレクション p. 108、p. 118参照。

28　『盛岡タイムス』1996年8月18日4面　盛岡の老舗159記事及び前掲註7書 p. 37。

29　前掲註 7 書「釣りよもやま話　座談会」」での柳村勝徳氏の談 p. 255。

30　「街もりおか」(1975年No.88)「仕事場めぐり　盛岡竿をつくる　柳村勇蔵さん」の柳村勇蔵氏談 p. 22。

31　前掲註7書「釣りよもやま話＝座談会＝」p. 255。

32　盛岡市材木町永祥院「幸田観世音」碑隣りの「釣供養塔」碑文、「釣供養塔　昭和10年12月16日建之　恵比壽講　佐々木徳太郎　伊藤仁太郎　藤澤勘次郎　小松谷五郎　平野□太郎　中村末吉　大塚□郎　熊谷庄吉　山口久次郎　名久井□郎　角掛□作　松□清志」

33　「街もりおか」(1968年No.8) p. 28、同（1974年N0.82) p.29。

34　前掲註7書 p. 33に「柳村式乾燥法」について記載がある。昔のかやぶき屋根の茅の抑えとして使用していた竹が燻されても腐っていないことからヒントを得たといい、防腐効果やつやだしを狙った。

35　ステッキ竿については前掲註6書 p. 129に「元禄16年（1703）の『俳諧広原海』には、釣り竿を仕込めば直に竹の枝という句が出ているが、これなどは現在でいうステッキ竿であり」とし、元禄期には京でステッキ竿がつくられていたとしている。

36　『幽境・岩手の釣り』(山と渓谷社、1988 年）の村田久「南部の釣り　盛岡毛鉤」p.220。

37　前掲註21書、2007年泉山氏が聞き取りした情報。

38　久徳外雄『日本釣漁法全書』(有隣堂、1900年)pp.26-27。

39　黒川智弘「こんなところに複合素材－釣竿における複合材料－」(『日本複合材料学会学誌』25、pp.122-126、1999年)。

要　旨

盛岡竿とは、岩手県産の竹を材料としてつくられた和竿で、渓流竿と鮎竿がある。盛岡竿の特徴としては、県内産の竹を使っていること、補強としてすげ口、すげ込みには黒の漆が塗られていること、非常に軽いこと、継ぎ竿の形式で携帯性に優れていること、１本の竹竿の中に竿を仕舞ってもいい調子を出すことができる点などがあげられる。様々な記録から制作当初頃の盛岡竿、現代の盛岡竿の材料や形状などを列挙し、盛岡竿についての特徴をそれぞれまとめた。

盛岡竿の発祥について明確に記す資料はないが、遅

くとも明治後期に遡ることができると指摘した。また、竿の制作者について当館収蔵資料の盛岡竿の特徴を調べると竿先にひかれた黒漆線の引きである程度制作者が判明する。柳村作の焼印が残るものを手掛かりに柳村作と谷藤作の漆線を示した。

キーワード：盛岡竿

表１　当館所蔵の盛岡竿

No	登録No	名称	長さ（全長）	長さ（※）	握りの長さ・直径	重さ	継ぎ数	制作者	備考
1	98076	盛岡竿 渓流竿	470.0㎝	189.2cm	39.7cm、直径2.3㎝	400g	3本継ぎ	柳村勝徳	かんざし付き。握りはすべて黒漆で塗られ、籐巻き。元竹のすげ込み破損。
2	98077	盛岡竿 鮎竿	460.0㎝	158.5cm	31.2㎝、直径2.0㎝	235g	3本継ぎ	柳村勝徳	かんざし付き。手竹に「柳作」焼印あり。中竹のすげ込みに割れあり、元竹のすげ口に漆の剥離あり。
3	191233-01	渓流竿	483.0㎝	157.0cm	32.9㎝、直径2.3㎝	260g	4本継ぎ	柳村	かんざし付き。すげ込みに後に補強のため貼った黒ビニールテープが巻かれている。中竹のすげ込みに割れ。
4	191233-02	渓流竿	524.0㎝	165.8cm	36.0㎝、直径2.0㎝	235g	4本継ぎ	柳村	かんざし付き。穂持のすげ口漆剥離。
5	191233-03	渓流竿	435.0㎝	134.3cm	34.0㎝、直径2.2㎝	220g	4本継ぎ	柳村	かんざし付き。手竹に「柳作」焼印あり。
6	191234-01	渓流竿	410.0㎝	128.5cm	30.8㎝、直径1.8㎝	160g	4本継ぎ	谷藤ヵ	穂先破損。
7	191234-02	渓流竿	443.0㎝	156.5cm	30.1㎝、直径2.0㎝	155g	3本継ぎ	谷藤ヵ	穂先破損。漆の剥離あり、すげ口破損。穂持すげ口に破損。
8	191613	渓流竿	523.0㎝	145.0cm	30.3㎝、直径2.4㎝	250g	4本継ぎ	柳村ヵ	かんざし付き。握りはすべて黒漆塗りで籐巻き。
9	191614	渓流竿	411.0㎝	132.5cm	32.7㎝、直径2.1㎝	215g	4本継ぎ	谷藤ヵ	かんざし付き。
10	191615	鮎竿	516.6㎝	180.0cm	50.2㎝、直径2.3㎝	347g	2本仕舞 3本継ぎ	柳村	かんざしなし。すげ口破損。握りの籐巻き部分と先端が黒漆塗り。
11	191616	鮎竿	509.2㎝	141.5cm	袴一体型、直径2.3㎝	386g	2本仕舞 4本継ぎ	柳村	かんざし付き。
12	191617	渓流竿	488.5㎝	162.0cm	31.0㎝、直径2.0㎝	152g	3本継ぎ	柳村	かんざし付き。手竹の先端に傷あり。
13	191618	ステッキ竿	413.6㎝	88.0cm	直径2.3㎝	215g	4本継ぎ	不明	穂先破損。
14	191619	渓流竿	473.0㎝	152.5cm	37.2㎝、直径2.3㎝	220g	4本継ぎ	不明	かんざし付き。手竹は石澤弘氏作（2020年）。

※一本に収めた時の竿の長さ

図１　盛岡竿の各部位の名称

岩手県立博物館研究報告　第 40 号　2023 年 3 月　27～55 ページ
Bulletin of the Iwate Prefectural Museum, No.40, pp. 27-55. March, 2023

No.1　９８０７６

写真１－１

写真１－２

写真１－３

写真１－４

No.2　９８０７７

写真２－１

写真２－２

写真２－３

写真２－４

写真２－５

写真２－６

No.3　１９１２３３－０１

写真３－１

写真３－２

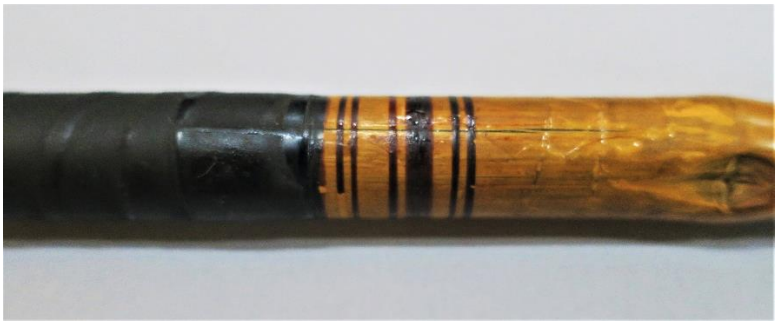


写真３－３

写真３－４

No.4　１９１２３３－０２

写真４－１

写真４－２

写真４－３

写真４－４

No.5　１９１２３３－０３

写真５－１

写真５－２

写真５－３

写真５－４

写真５－５

No.6　１９１２３４－０１

写真６－１

写真６－２

写真６－３

写真６－４

写真６－５

No.7　１９１２３４－０２

写真７－１

写真７－２

写真７－３

写真７－４

写真７－５

No.8　１９１６１３

写真８－１

写真８－２

写真８－３

写真８－４

写真８－５

No.9　１９１６１４

写真９－１

写真９－２

写真９－３

写真９－４

写真９－５

No.10　１９１６１５

写真１０－１

写真１０－２

写真１０－３

No.11　１９１６１６

写真１１－１

写真１１－２

No.12　１９１６１７

写真１２－１

写真１２－２

写真１２－３

写真１２－４

No.13　１９１６１８

写真１３－１

写真１３－２

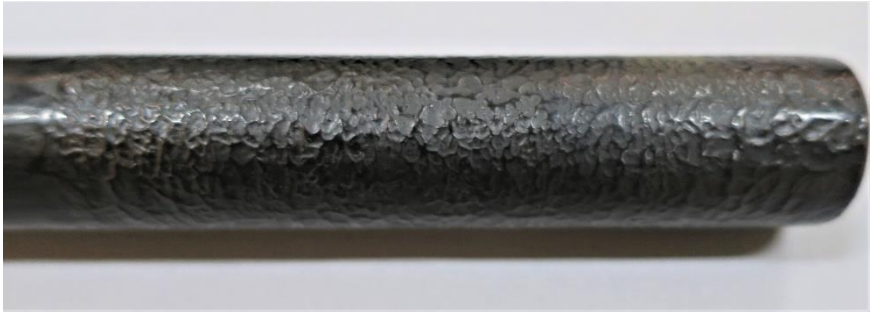


写真１３－３

No.14　１９１６１９

写真１４－１

写真１４－２

写真１４－３

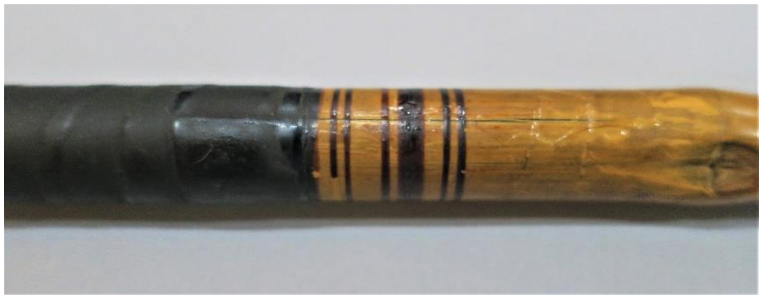
写真１４－４

写真１５

No.2
98077　柳村作　３本継ぎ
※手竹に「柳作」の焼印あり
元竹のすげ口
（細線２本、細線１本、太線１本、細線２本）

穂持のすげ口に細線２本

写真１６



No.3
191233－01　柳村作　４本継ぎ
元竹のすげ口
（細線２本、細線１本、太線１本、細線２本）

穂持のすげ口に細線２本

中竹のすげ口に細線２本

写真１７

No.4
191233－02　柳村作　４本継ぎ
元竹のすげ口
（細線２本、細線１本、太線１本、細線２本）

穂持のすげ口に細線２本

中竹のすげ口に細線２本

写真１８

No.5
191233－03　柳村作　４本継ぎ
※手竹に「柳作」の焼印あり
元竹のすげ口
（細線２本、細線１本、太線１本、細線２本）
穂持のすげ口に細線２本
中竹のすげ口に細線２本

写真１９

No.12
191617　柳村作　３本継ぎ
元竹のすげ口
（細線２本、細線１本、太線１本、細線２本）
穂持のすげ口に元竹と同じ線
（細線２本、細線１本、太線１本、細線２本）

写真２０

No.6
191234－01　谷藤作ヵ　４本継ぎ
元竹のすげ口
（細線２本、細線１本、太線１本、細線１本、細線２本）
穂持のすげ口に元竹を同じ線
中竹のすげ口に元竹と同じ線

写真２１

No.7
191234－02　谷藤作ヵ　3 本継ぎ
元竹のすげ口
（細線 2 本、細線 1 本、太線 1 本、細線 1 本、細線 2 本）

穂持のすげ口に元竹と同じ線（右の 2 本線が剥離しているが跡が確認できる）

写真２２

No.9
191614　谷藤作ヵ　4 本継ぎ
元竹のすげ口
（細線 2 本、細線 1 本、太線 1 本、細線 1 本、細線 2 本）

穂持のすげ口に元竹と同じ線

中竹のすげ口に元竹と同じ線